慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会学再入門 : 我々はどこから来たのか我々は何者か我々はどこへ行くのか
Sub Title	Beginning sociology anew : where do we come from? what are we? where are we going?
Author	浜, 日出夫(Hama, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2020
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.89 (2020.) ,p.75- 85
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別寄稿 最終講義
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000089-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〈最終講義〉

社会学再入門

——我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか——

Beginning Sociology Anew: Where Do We Come from? What Are We? Where Are We Going?

浜　　日　出　夫*
Hideo Hama

卒業とは
出口じゃなく
入り口だろう
AKB48

我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか

「我々はどこから来たのか 我々は何者か我々はどこへ行くのか」，これはゴーギャンの絵のタイトルです。画面右手に赤ん坊，中央に成人，左手に老婆が描かれ，右から左へ人の一生が描かれています。見たことのある人も多いと思います。ゴーギャンはこの絵を 1897 年から 98 年にかけてタヒチ島で描きました。

ゴーギャンがヨーロッパを遠く離れた南太平洋のタヒチ島でこの絵を描いていたのとちょうど同じころ，ヨーロッパではウェーバーやジンメル，デュルケムといった，「1890 年代の世代」と呼ばれる一群の社会学者たちが同じ問いと格闘していました。当時は，産業革命後，急速に産業化・都市化が進行し，ルネサンス・宗教改革・科学革命によって開始された伝統的社会から近代的社会への移行が最終段階を迎え，いよいよ近代社会がその全貌を現わそうとしていた時代でした。社会学は，自分自身もその産物である近代社会の来し方と現在，その行く末を，その内部から記述しようとする企ての産物として誕生しました。社会学が「近代社会の自己認識の学」と言われるゆえんです。この意味で，ゴーギャンの絵と「1890 年代の世代」の社会学は，同じ時代に同じ問いと格闘した双子の産物であったと言うことができます。

今日は，退職を迎えるにあたって，僕も僕の来し方を振り返りつつ，社会学の原点というべきこの問いを取り上げてみたいと思います。タイトルは「社会学再入門」としました。

* 東京通信大学情報マネジメント学部，慶應義塾大学名誉教授

社会学再入門

「社会学再入門」と言っても，みなさんにもう一度社会学入門の講義をしようというわけではありませんので，ご安心ください。僕自身がもう一度社会学に入門し直そうということです。

「〇〇入門」という講義はたいてい初学者向けにある学問の初歩の手ほどきをする講義の名称として用いられています。しかし，今日の「入門」は文字通り「新たに門をくぐる」という意味です。

シュッツはフッサールについてこのようなことを述べたことがあります。「彼 [フッサール] の理想は，語のもっとも真なる意味での，哲学の『初心者（beginner)』たることであった」[1)]。フッサールはけっして哲学の初心者ではありませんでした。現象学の大家です。シュッツがここで “beginner” と言っているのは文字通り「始める人」「新しく始める人」のことでした。そして，この意味ではフッサールはたしかに何度も新しく始めた人でした。『イデーン』で超越論的現象学を完成させたと思ったら，『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』では生活世界論を展開し，晩年はさらに発生的現象学へと思索を深めていきました。

今日の「社会学再入門」というタイトルも，シュッツがフッサールについて述べた意味での社会学の「初心者」であること，「社会学を新たに始める者」でありたいという意味を込めたものです。初めてくぐる門ではないので「再入門」です。

最初の入門

まず 47 年前の最初の入門を振り返ってみたいと思います。すこし昔話をすることをお許しください。

僕は 1972 年に大阪大学人間科学部に入学しました。1 期生でした。教養部で最初に受けた社会学の講義は吉田民人先生の社会学でした。吉田先生はこの年に京都大学に移られていましたが，非常勤講師として社会学を担当されていました。

吉田先生は教室に入ってこられると，腕時計をはずして教卓に置かれ，それからすこしかん高いよく通る声で講義を始められました。内容は，いまから振り返ると名論文「生産力史観と生産関係史観」を解説されたものでした。大学に入りたての新入生にどれだけ理解できたか，はなはだ怪しいものでしたが，先生の講義のスピード感，無限に 4 象限分割が反復されていくのを見ているときの眩暈を覚えるような感覚，これらは高校の授業では経験したことのないもので，吉田先生の講義を通してたしかに自分が大学生になったことを実感したように思います。吉田先生は京都大学を経て，東京大学に移られ，その後慶応の文学部の客員教授も務められました。

翌年，井上俊先生が吉田先生の後任として着任され，2 年生対象の教養ゼミに参加しました。テキストはバーガーの *Invitation to Sociology*（『社会学への招待』）でした。まだ翻訳が出る前で，それがどういう本なのか，当時の僕は知る由もありませんでしたが，それと知らずに現象学的社会学に触れていたことになります。

マルクスとパーソンズの共倒れ

当時の社会学入門はマルクスとパーソンズと相場が決まっていました。人間科学部でも，「社会学概論」は田中清助先生がマルクスを講じられ，「社会心理学概論」では濱口恵俊先生がパーソンズを講じられていました。これはたいていどこの大学でも同じで，僕たちの数年上の先輩たちはマルクスかパーソンズのどちらかを学んで社会学者になっていきました。しかし，1972 年のキャンパスではマルクス

もパーソンズももはや学生をひきつける力を失っていました。このマルクスとパーソンズの共倒れという状態が，僕が最初に社会学に入門したときの社会学の原風景でした。

田中先生の講義も濱口先生の講義もむずかしくてわからないというより，それをどう自分が生きている社会と接続してよいかがわからない，リアリティがつかめないという形でよく理解できませんでした。これはまずいんじゃないかと思って，友人たちとパーソンズらの『行為の総合理論をめざして』の読書会を始めましたが，やはり途中で投げ出してしまいました。

この共倒れ状態は，ひとつには，マルクスとパーソンズの理論をそれぞれ体現していると考えられていたソ連とアメリカ――戦後の日本においてユートピア・イメージを提供してきた2つの社会――が，一方はソルジェニーツィンの『収容所群島』などによってその全体主義的な支配が明らかになりつつあったことによって，他方はベトナム戦争の泥沼化によって，いずれもかつての輝きを失ってしまっていたためでした。また日本でも「よりよい社会」をめざした全共闘運動が1969年に安田講堂で挫折し，1972年，大学に入学する直前の浅間山荘事件で理想主義の最後のかけらも吹き飛んでしまいました。僕たちの世代は「しらけ世代」と呼ばれた世代でした。

終わったのは理想だけではありませんでした。「よりよい社会」をめざした学生運動が挫折したのに続いて，「より豊かな社会」の夢を追った高度経済成長も，1973年のオイルショックで突然終わりを告げました。

「よりよい社会」にせよ「より豊かな社会」にせよ，めざすべき目標を失ったということは，社会を外から眺める視点が失われたということでした。マルクスとパーソンズのわからなさは，「社会構成体」にせよ「社会システム」にせよ，外部から社会全体を俯瞰する視線と自分の視線を重ねることができないわからなさでした。

「傘がない」

そのころはやっていたのが，井上陽水の「傘がない」という曲でした。

都会では自殺する若者が増えている
今朝来た新聞の片隅に書いていた
だけども問題は今日の雨　傘がない
行かなくちゃ　君に逢いに行かなくちゃ
君の町に行かなくちゃ　雨にぬれ
つめたい雨が今日は心に浸みる
君の事以外は考えられなくなる
それはいい事だろ？

ここには，人口100万人当りの自殺者数を数える『自殺論』のまなざしに対する違和感がはっきり歌われています。それよりも，君に逢いに行くための傘がないことのほうが重要な問題であると言い，そしてそれを「いい事だろ？」ときっぱりと肯定しています。2番の歌詞でも「テレビでは我が国の将来の問題を誰かが深刻な顔をして しゃべっている だけども問題は今日の雨傘がない」と歌っています。この歌は，しばしば批評されたように，社会から私生活への撤退を歌ったものではなく，社会を外部か

ら俯瞰するまなざしから，社会の内部から社会を見るまなざしへの，社会を見るまなざしの「コペルニクス的転回」を歌ったものでした。もし社会学をやるとすれば，この歌のような社会学でなければなりませんでした。必要なのは，社会の内部から社会を記述する言葉でした。問題はそのような言葉がどこにあるかでした。

『社会学の再生を求めて』

そのころ読んだのが，1974 年に翻訳の第 1 巻が出たグールドナーの『社会学の再生を求めて』でした。

グールドナーは，この本のなかで，社会学者が，研究対象である人びとについては，社会が人間を形成するという命題を適用し，自分自身については，人間が社会を形成するという命題を適用する「二重帳簿」[2] をつけていることを批判し，社会学者もまた他の人びとと同様，社会の一員にほかならないことを暴露していました。

「主体と客体，社会学者と非専門家といった異なる二種類の人間がいて，各々の行動は異なる方法で考察されねばならぬと仮定することを，社会学者はやめなければならない。ただ一種類の人間しか存在しないのだ。いまこそ，われわれ社会学者はその人類の一員であるということの，あらゆる含意を認識するときなのである。」[3]

もはや社会の全体を外部から俯瞰できる超越的な視点など存在しないことは明らかでした。このときから，社会の内部で生きている自分の視線と切り離して社会について語らないということは，僕にとっては社会学を行なう上での「倫理」であると思われました。僕たちの世代はろくに社会学を学びもしないうちに，社会学への批判を刷り込まれた過剰に反省的な世代でした。僕たちの少し上の世代はマルクスかパーソンズを学んで社会学者になっていきましたし，僕たちのすぐ下にはまたハーバマスやルーマンを学んで社会学者になる世代が現れました。僕たちの世代は，マルクス・パーソンズ世代と，ハーバマス・ルーマン世代に挟まれた狭間の世代でした。

現象学的社会学研究会

問題は，社会の内部から社会を記述する言葉がどこにあるかでした。もはやマルクスやパーソンズを読んで社会学者になることはできないことは明らかでした。

学部に進級したあとの指導教授は徳永恂先生でした。徳永先生は，学部ゼミでは，シュトラッサーの *Phänomenologie und Erfahrungswissenschaft vom Menschen*（『人間科学の理念』）の講読をされ，大学院（文学研究科）ではシュッツの *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*（『社会的世界の意味構成』）の講読をしておられ，こちらも参加させていただいていました。

卒業論文はウェーバーの学問論について書きました。ウェーバーの認識論と行為論を，意味付与主体（「文化人」）という人間像から統一的にとらえようとするものでした。ウェーバーの学問論は，社会学をするということはどういうことかを反省的に問いつつ社会学をする，ということの可能性を示してくれているように思えました。

大学院に進学したあとは，自然とシュッツの *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt* に向かうことになりました。それは，ウェーバーの学問論をさらに一歩進め，社会の中で生きる行為者にとって社会が何であるかを行為者自身の視点から描こうとするものでした。そこにはまさに社会の内部から社会を記述するための言葉が存在していました。

そのころ，マルキストになるのでもなくパーソニアンになるのでもなく，社会学者になるための狭い道のひとつが，僕もたどっていたウェーバーからシュッツへと抜ける道でした。しかし，この道をたどったのは僕だけではありませんでした。同じ道をたどっていた同世代の人たちが作っていたのが現象学的社会学研究会という小さな研究会でした。そこには，片桐雅隆さん，那須壽さん，西原和久さん，江原由美子さん，桜井洋さん，吉沢夏子さん，山田富秋さん，好井裕明さんたちが参加していました。

そのころ現象学的社会学は，マルクスをやっている人からは「私生活主義」，パーソンズをやっている人からは「主観主義」「ミクロ社会学」とけなされるか，そうでなければ単なる流行とみなされていました。僕たちに共感を示してくださる年長の先生がほとんどなかった中で，その数少ないお一人が慶応におられた山岸健先生でした。何年のことだったか正確には覚えていませんが，塾監局3階の会議室で開かれた研究会で報告したことがあり，そのころは現在の北館のところにあった山食で開かれた懇親会に参加したことを記憶しています。その後，山岸先生の後任として慶応に来ることになるとはまったく思いもしませんでした。

歴史と記憶の社会学

その後，新潟大学・筑波大学で教えましたが，大きく言えば3つのことを新たに始めました。

学説史研究では，ひとつにはガーフィンケルの初期の草稿研究を始めました。これはウェーバー，シュッツからさらに歴史を下る自然な流れでした。もうひとつは，ジンメルと出会ったことです。副田義也先生が主催され，居安正先生を講師にお迎えして，毎月開かれていたジンメル読書会に参加し，これが現在までジンメル研究会として続いています。

もうひとつは，「歴史と記憶の社会学」という分野で仕事を始めました。きっかけは，筑波大学には社会調査実習という科目があり，教員が交替で担当することになっていて，1995年に博物館の調査を行なったことでした。それまで調査の経験はまったくありませんでしたが，これがおもしろく，翌年から土浦海軍航空隊（予科練），巨大飛行船グラーフ・ツェッペリン号の飛来，筑波山名物がまの油の調査を学生たちと継続して行ないました。

「歴史と記憶の社会学」は，歴史を歴史の外部から俯瞰する歴史社会学ではなく，歴史の内部から歴史を記述しようとするものです。それは社会を社会の内部から記述することの延長上にあるものでした。

1999年に慶応に赴任しましたが，慶応で新たに始めたのが広島の原爆被害の記憶の調査です。きっかけは1995年に博物館調査をしていたときに，スミソニアン博物館の原爆展をめぐる論争を横目で見ていたことと，翌年ワシントンであった学会に参加したおりに，広島に原爆を投下したB29エノラ・ゲイ号の修復された機体を見たことでした。見たというよりも目が合ってしまったという感じでした。慶応に移った1999年から広島で調査を始め，2003年から2009年までの7年間，ゼミのみなさんと広島で調査を続けました。今日ここに来ておられる5期から11期のみなさんの中にはいっしょに広島に行った人たちもいると思います。

2007年からは法学部の有末賢先生と被爆者調査史研究会を始めました。それは戦後，数多く行なわれながら，その後忘れられ歴史に埋もれてしまった被爆者調査を掘り起こして読み直そうという研究会でした。その成果は2013年に『被爆者調査を読む――ヒロシマ・ナガサキの継承』（慶應義塾大学出版会）としてまとめることができました。

この20年余りは，1995年に行なった博物館調査が勝手に転がりはじめ，そのあとを追いかけていた

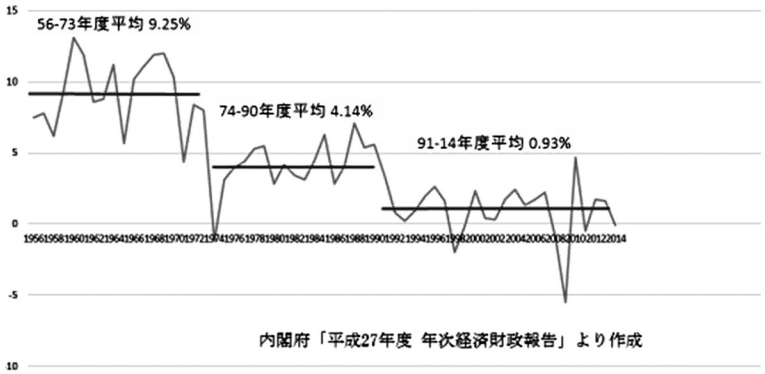


図 1. 実質経済成長率の推移

らいつの間にかここまでたどりついていた，研究者として幸せな時間でした。

第 1 の近代から第 2 の近代へ

「僕はどこから来たのか」を振り返って長々と昔話をしてしまいました。次に「僕はどこから来たのか」を「我々はどこから来たのか」と関連づけてみたいと思います。ミルズは「社会科学は個人生活史と歴史，および社会構造内におけるそれらの相互浸透を考察の対象とする」[4] と述べています。

この図を見てください（図 1）。これは戦後の日本の実質経済成長率の推移を表したグラフです。これを見ると，戦後の経済成長率は高度経済成長期から安定成長期を経て現在の低成長期へと，階段をトントンと 2 段下るように下がっていることがわかります。

まず 1955 年の神武景気で始まった高度経済成長期は 1973 年まで続きました。1956 年から 1973 年までの実質経済成長率の平均は 9.25％です。しかし，1973 年のオイルショックで高度経済成長は突然終わりを告げ，1974 年には-1.2％のマイナス成長になります。そして，欧米諸国はこのまま低成長期に入り，ベックの言葉で言えば，「第 1 の近代」から「第 2 の近代」に移行していきますが，日本はオイルショックを乗り越え，安定成長の軌道に乗ります。1974 年から 1990 年まで続く安定成長期の実質経済成長率の平均は 4.14％でした。この時代が “Japan as No. 1” の時代です。しかし，それも 1991 年のバブル崩壊で終わり，日本も低成長期に入ります。1991 年から 2014 年までの実質経済成長率の平均は 0.93％です。

僕は 1954 年生まれなので，高度経済成長期がはじまる直前に生まれて，子ども時代を高度経済成長が続く中で過ごし，その後日本経済が階段をトントンと 2 段下っていくのを経験してきたことになります。みなさんの中には低成長期しか知らないという人も多いでしょう。

このグラフを見ると，僕の大学時代は折れ線グラフが真っ逆さまに急降下している時代だったことがわかります。大学に入学した 1972 年の実質経済成長率が 8.4％，73 年が 8.0％，74 年がー 1.2％でした。これを見ると，第 1 の近代の社会理論であったマルクスとパーソンズに対する違和感はある意味で当然だったように思えます。

ほかのデータも見てみましょう（表 1）。これは僕が大学に入学した 1972 年と 2017 年のデータを比較したものです。

1972 年の実質経済成長率はすでに述べたように 8.4％，2017 年は 1.7％です。1972 年の完全失業率は

表 1.

	1972年	2017年
経済成長率	8.4%	1.7%
失業率	1.4%	2.8%
非正規雇用(1984年)	15.3%	37.3%
生涯未婚率(1970年)		(2015年)
男	3.3%	男 23.4%
女	1.7%	女 14.1%
出生率	2.14	1.43
専業主婦世帯(1980年)	64.5%	35.0%
高齢化率(1970年)	7.1%	27.7%

1.4%，働く意志のある人はほとんど働くことができた完全雇用の状態でした。2017 年は 2.8%です。経済成長率が 2 段トントンと下るのと逆に，失業率はトントンと 2 段階段を昇るように高くなっていきました。1955 年から 73 年までの完全失業率の平均は 1.45%，74 年から 90 年の平均は 2.15%，91 年から 18 年の平均が 3.70%です。バブル崩壊後，いったん 5%台まで上昇しましたが，団塊の世代のリタイアにともなって現在は低下しつつあります。

雇用の中身も大きく変化しました。高度経済成長期には多くの人が終身雇用と年功賃金という日本的経営のもとで働きました。非正規雇用の割合をさかのぼれるのは 1984 年の 15.3%ですが，2017 年には 37.3%，現在では 3 分の 1 以上の人が非正規雇用という不安定な形で働いています。

変わったのは働き方だけではありません，家族の形も大きく変化しました。

生涯未婚率というのは 50 歳の時点で一度も結婚したことのない人の割合ですが，1970 年の生涯未婚率は男性で 3.3%，女性で 1.7%，結婚する意志のある人はほとんど結婚した皆婚の時代でした。これが 2015 年には男性で 23.4%，女性で 14.1%になっています。男性の 4 分の 1，女性の 7 人に 1 人はもう一度も結婚していません。

またこれにともなって出生率も大きく低下しました。1972 年の出生率は 2.14，2 人っ子の時代でした。2017 年は 1.43，人口置換水準を大きく下回り，2009 年からは人口減少が始まっています。

1972 年には専業主婦世帯のほうが共働き世帯よりも多かったのが，現在では共働き世帯のほうが多くなっています。

また 1970 年の高齢化率は 7.1%，まだ若い国でした。これが 2017 年には 27.7%となっています。僕も先日高齢者の仲間入りをしました。さらに 2035 年には 32.8%となって，ほぼ 3 人に 1 人が高齢者になると推計されています。

1972 年には，働く意志のある人はほとんど働くことができ，その多くは正社員として働いていました。そして，結婚する意志のある人はほとんどが結婚して，2 人子どもをもうけ，夫は外で仕事，妻は専業主婦として家で家事と育児を行なう性別役割分業を特徴とする家族を形成しました。社会学では，このような家族を「近代家族」と言っています。

それから 50 年近く経って，社会の姿はすっかり変わってしまいました。いまではみながみな正社員として働いているわけではありませんし，みながみな結婚するわけではありませんし，結婚しても子どもをもつとは限りません。同じ日本社会ですが，この 50 年近くの間にまるで違う社会になってしまっ

ていると言ってよいでしょう。

さきほど述べたように，ベックはこの 2 つの社会を「第 1 の近代」「第 2 の近代」と呼んでいます。伝統的社会では，人びとはイエやムラなどの伝統的共同体に包摂＝束縛されて生活していました。日本では，戦前まで人口の多くはそのような生活をしていました。しかし，近代化にともなって，人びとは伝統的な共同体から解放されて，近代家族や企業，労働組合などの近代的な集団に再編成されていきます。これが「第 1 の近代」です。高度経済成長期から安定成長期にかけての日本社会はほぼこれに当ると考えてよいでしょう。そして，ベックによれば，「第 2 の近代」では，これらの近代的集団からさらに個人が解放＝追放されていきます。人びとがかならずしも正社員として雇用されているとは限らず，またかならずしも近代家族を形成するとは限らない現在の日本社会は「第 2 の近代」に移行しつつあると言ってよいでしょう。

ウェーバーやジンメル，デュルケムが「我々はどこから来たのか我々は何者か我々はどこへ行くのか」という問いと格闘していたのは，伝統的社会から「第 1 の近代」への移行の完成期でした。テンニースはいち早くそれを「ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ」と定式化しましたし，ウェーバーは「官僚制化」，ジンメルは「社会分化（集団の拡大と個性の発達）」，デュルケムは「エゴイズムとアノミー」としてその移行を定式化しました。

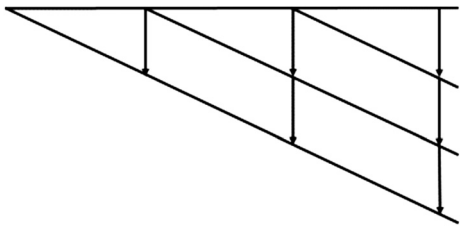
そして，「第 1 の近代」から「第 2 の近代」への移行が始まっている現在，社会学はふたたび「我々はどこから来たのか我々は何者か我々はどこへ行くのか」という問いと向き合っています。ウェーバーは社会学のことを「永遠の若さを与えられている科学」[5] と言ったことがあります。これは，社会が移り変わるのにつれて，くりかえし「我々はどこから来たのか我々は何者か我々はどこへ行くのか」という問いと向き合わなければならない社会学という学問の特徴を言い表したものと考えることができます。そして，社会学が「永遠の若さを与えられている科学」であるとすれば，僕たちもまた何度でも新たに社会学の門をくぐり直さなければならないことになります。再入門は社会学にとって学問の本質に属する事柄と言ってよいでしょう。何度でも新しく始めなければならないということはむなしいことのように思えますが，つねに新しく始めることができるということはまた希望でもあります。最後に，僕の再入門計画についてかんたんにお話しておきましょう。

止まった時計

最近，僕が関心を持っているのは「止まった時計」[6] です。

もっとも有名なのは広島平和記念資料館に展示されている 8 時 15 分で止まった時計でしょう。そのほかにも長崎原爆資料館には 11 時 2 分で止まった時計がありますし，神戸には 5 時 46 分で止まった時計，東北の津波被災地には 2 時 46 分で止まった時計が残されています。これらはそれぞれ，広島への原爆投下時刻（1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分），長崎への原爆投下時刻（1945 年 8 月 9 日午前 11 時 2 分），阪神淡路大震災発生時刻（1995 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分），東日本大震災発生時刻（2011 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分）で止まった時計です。

時計の機能は時を刻み，時刻を告げることです。止まった時計はもはや時を刻みません。止まった時計を見ても今何時かわかりません。もはや役に立たないはずの止まった時計がこのように保存されているのはなぜでしょうか。それは，止まった時計は，動いている時計が刻む時間とは異なる時間を刻んでいるからではないか，というのが僕の仮説です。



斎藤慶典『思考の臨界』勁草書房、46頁、にもとづいて作成

図 2. 時間図表

それでは，止まった時計が刻んでいる，動いている時計が刻むのとは異なる時間とはなんでしょう。

僕たちはふつう時間を流れ去っていくものと考えて，それを矢印で表します。しかし，「永遠の初心者」フッサールは時間を三角形で表しました（図 2）。

横軸は水平に流れ去る時間を表し，縦軸は垂直に積み重なる時間を表しています。フッサールは，時間を，ただ水平に流れ去っていくものとしてではなく，刻々と垂直に積み重なっていくものとしてとらえました。フッサールによれば，水平に流れ去る時間の中で現れては過ぎ去っていく出来事は，しかし消えてなくなってしまうのではなく，そのつどの現在において地層のように垂直に積み重なって保存されています。僕たちが過ぎ去った出来事を思い出すことができるのはそのためです。

そして，動いている時計が水平に流れ去る時間を「何時何分何秒」というように刻んでいるのに対して，止まった時計は垂直に積み重なった時間を刻みます。止まった時計が積み重なる時間を刻むというのはどういうことでしょう。広島平和記念資料館に展示されている 8 時 15 分で止まった時計を例として考えてみましょう。あの時計は広島への原爆投下時刻 1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分で止まったままもう動きません。僕たちは動いている時計に追われて毎日忙しい忙しいと言いながら生活していますが，1 年間動き続けた時計が指す時刻と止まった時計が指している時刻が 1 年に 1 度重なります。そのとき平和記念式典では 1 分間の黙禱が行なわれます。その黙禱の中で，止まった時計の目盛りが 1 目盛り進み，「あれからまた 1 年経った」ことを告げます。止まった時計は，1 年に 1 度「あれから 10 年経った」「50 年経った」「74 年経った」というように，原爆の投下から積み重なった時間の厚みを告げます。それは原爆の犠牲者がもはや生きることのできなかった時間の厚みであり，また生き残った者が原爆で愛する人を亡くしたあと生きてきた時間の厚みです。

相互行為はかならず時間的な調整を必要とします。今日みなさんが全国からここに集まってくださったのも，僕たちが持っている時計が同じ時刻を指しているからです。動いている時計なしにこの最終講義は成り立ちません。しかし，社会は生きている人間だけで成り立っているわけではありません。みなさんも仏壇に手を合わせたり，墓参りをしたりするでしょう。愛する人に先立たれるということは人間にとって避けることのできない運命です。そして，愛する人に先立たれたあと，遺された者が先立った者の記憶をかかえて生きていかなければならないこともまた人間の運命です。

動いている時計は生きている人間の相互行為のためには役立ちますが，亡くなった人との相互行為のためには役立ちません。止まった時計は，生き残った人間と亡くなった人間が 1 年に 1 度出会うための約束の時刻を指して止まっています。そして，1 年に 1 度動いている時計が指す時刻と，止まった時計が指している時刻が重なるとき，黙禱が行なわれ，その黙禱の中で生き残った人間と亡くなった人間の

間の沈黙の相互行為が生じます。

止まった時計は，人間が水平に流れ去っていく時間を生きているだけではなく，垂直に積み重なっていく時間を同時に生きていることを象徴するものです。また，愛する人に先立たれることが人間にとって避けることのできない運命であること，遺された人が先立った人の記憶をかかえて生きていかなければならないことを象徴しています。僕はそのような人間のあり方を「サバイバー」と呼んでいます。僕はそのような「サバイバー」としての人間のあり方，またそのような人間からなる社会のあり方を，止まった時計を通してこれから考えてみたいと思っています。

卒業とは 出口じゃなく 入り口だろう

僕は慶応に勤めてちょうど 20 年になります。長かったようですが，振り返ってみるとあっという間だった気がします。しかし，慶応で過ごした 20 年は流れ去って消えてしまったわけではありません。今日ここに集まってくださったゼミの 1 期生から 19 期生のみなさんや，いっしょに研究してきたみなさんのお顔を拝見していると，僕が慶応で過ごした 20 年の時間が僕の目の前に積み重なっているのを見ているような気がします。この 20 年という時間をいっしょに過ごしてくださったみなさんにあらためて感謝申し上げます。

しかし，これで終わりというわけではありません。AKB48 は「卒業とは出口じゃなく入り口だろう」と歌いました。僕も新たに社会学の門をくぐろうと思います。これからもよろしくお付き合いください。

今日はありがとうございました。

付記

本稿は 2019 年 2 月 2 日に行なった最終講義を再構成したものです。当日ご出席いただいたみなさんに感謝申し上げます。筆者の略歴・業績リストは『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第 87 号，2019 年，をご覧ください。（追記：山岸健先生は 2020 年 3 月 17 日逝去されました。先生もまた「サバイバー」のおひとりでした。ご冥福をお祈りいたします。）

注

1）A・シュッツ「現象学のいくつかの主要概念」『アルフレッド・シュッツ著作集第 1 巻社会的現実の問題{Ⅰ}』マルジュ社，1983 年，176 頁
2）A・W・グールドナー『社会学の再生を求めて 1』新曜社，1974 年，69 頁
3）同，33 頁
4）C・W・ミルズ『社会学的想像力』紀伊國屋書店，1965 年，188 頁
5）M・ウェーバー『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波文庫，1998 年，144 頁
6）浜日出夫「止まった時計」『法学研究』90-1，2017 年

引用・参考文献

M・ウェーバー『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波文庫，1998 年
A・W・グールドナー『社会学の再生を求めて 1』新曜社，1974 年
斎藤慶典『思考の臨界』勁草書房，2000 年
A・シュッツ『社会的世界の意味構成』木鐸社，1982 年

A・シュッツ「現象学のいくつかの主要概念」『アルフレッド・シュッツ著作集　第1巻 社会的現実の問題｛I｝』マルジュ社，1983年
S・シュトラッサー『人間科学の理念』新曜社，1978年
P・L・バーガー『社会学への招待』思索社，1979年
浜日出夫「止まった時計」『法学研究』90-1，2017年
浜日出夫・有末賢・竹村英樹編『被爆者調査を読む――ヒロシマ・ナガサキの継承』慶應義塾大学出版会，2013年
C・W・ミルズ『社会学的想像力』紀伊國屋書店，1965年